第五部

第一章　京言葉における「幼児語」

はじめに

ここでは、「育児語」としないで「幼児語」として捉えた。検討を要する。

筆者は、「橘女子大学夏季公開講座」（一九八一年七月一六日・於元橘女子大学）において、「町家の京言葉」と題して、子供の世界と京言葉との関わりについて述べた。調査結果として、「遊びの名前」「おもちゃの名前」「おやつの名前」等や子供の生活環境全般について報告した。被調査者の生育時、子供特に学齢期前の子供の言語環境は、方言の宝庫であったと考える。

「子供の世界と京言葉」についての論考の一つとして、本稿においては「幼児語」を取り上げて記述していく。調査結果を紹介し、現在の京都の言葉に比して、一時期前の京都の言葉がより豊富な幼児語を有し、それらの幼児語に方言的特色が濃いことを指摘したい。

(一)　京言葉における幼児語の定義と性格

広義に、「幼児語」は幼児（一歳から六歳まで）の用いる言葉を指す。「育児語」と重なる点が多い。発育に応じての言語の発達過程を問題にする形で、取り上げられることが多い。語彙量の発達・構音の発達・文構成能力の発達等が、問題とされる。

狭義に、「幼児語」は大人の用語と語形の異なる幼児用の語を指す。幼児は大人が語りかける語を模倣することによって、語を獲得する。幼児が語を身につけやすいようにという配慮から、幼児の覚えやすく発音しやすい語形を大人が選んで幼児語とする。又、幼児が、自分の物の捉え方で造語して幼児語を生み出すこともある。狭義の「幼児語」は、大人と幼児の相互作用が作り出したものと言える。流通範囲は、一家族内・一地域内・一地方内等、語によってまちまちである。「育児語」を含むものとしたい。

本稿では、狭義の「幼児語」のうち、京都の町家においてある程度一般性をもっている語を扱う。

現在、狭義の「幼児語」を大人は初めから用いるべきでないとか、用いてもできるだけ早い時期に大人の用語に切りかえるべきだとか、言われることがある。

被調査者が育った時代、町家の嫁は、使用人より早く起き使用人より後に眠るという厳しい立場におかれていたという。当然、育児に関して、祖父母特に祖母が発言力と時間とを有していた。祖父母が幼児に接する限りにおいて、幼児語から大人用語への切りかえは、総じて、現在より遅かったと推測される。

訪問時の玄関でのやりとりに、被調査者の一人である婦人は、「アイヤ、イトオスカ」と筆者の足の怪我のことを尋ねられる。ある時には、「オミヤ、ドードス」と問われる。「足」の意の「アイヤ」は幼児語、「オミヤ」は女性語

と扱われている。年長の人に対しては用いられないのであろうが、年少の成人である筆者に対して「アイヤ」を使用するのである。このことについては、後にもう一度触れる。

（二）京言葉における幼児語の記述

以下に、調査結果の記述を試みる。第一の目的は、できるだけ多くの「幼児語」を集め、紹介することにある。特色についても、後述する。語例の下に〔　〕で共通語訳を示す。説明については、調査結果を尊重して特に統一のための手を加えていない。長音は統一して「ー」で示す。

名詞

〈身体に関するもの〉

アイヤ／アンヤ／アンヨ〔足〕

「アイヤ」は、女子が目下に用いることもある。

○　アイヤ、イトオスカ。

「アンヨ」は、〔歩行〕の意にも用いる。

オクチ〔口〕

オセナ〔背中〕

オッパイ／オチチ〔乳房〕

〔母乳〕の意の方が、幼児語としては主。

オツム／オツモ〔頭〕
オナ／オナー〔腹〕
　○　オナー、イタイ。
　○　オナー、ピーピー。〔下痢状態〕
　○　オナー、ペコペコ。〔空腹状態〕
オミミ〔耳〕
カンカン〔髪〕〔かんざし〕
　○　カンカン　結ーテ。
チンチン／オチンコ〔陰茎〕
テテ／オテテ〔手〕
ハーハー〔歯〕
ホッペ／ホッペタ〔頬〕
「ホッペ」と促音が入る語形は関東風で、大人用語と同じく「ホーベタ」としか言わないという人も。
ポンポン〔腹〕別に〔裸〕の意がある。
　○　ポンポン、イタイ。
　○　ポンポンデ　逃ゲ回ル。
メメ／メーメー／オメメ〔目〕
〔額〕のことを、大人は「オデコ」「デボチン」等と言うが、この「オデコ」を幼児語として取り扱うかどうか迷って、ここでは省いておいた。

〈生理現象・病気等に関するもの〉

アイタタ／イタイタ〔怪我〕

ウンコ／ウンウン〔大便〕

キーキー〔気分〕〔病気〕

○　キーキーガ、ワルイ。

コンコン〔咳〕

シー／シシ／シッコ／オシッコ〔小便〕

○　シシオ、スル。

小便をさせる時の大人から幼児への掛け声としては、「シーコイコイ」「シーコッコ」「シーシーコッコ」等がある。

〈衣服・装身具等に関するもの〉

オコボ〔こっぽり下駄〕

女性語としても取り扱いうる語である。

カサカサ〔傘〕

カッカ／カッコ／コッコ／ゲタゲタ／チャッチャ〔下駄〕

「チャッチャ」は〔歩行〕の意にも用いる。

クルクル〔帯〕

〔物をまわすこと〕の意にも用いる。

ジョジョ〔草履〕

ターター／ピーチャン〔足袋〕

○　サブイサブイ。ターター、オハキ。

少し下の世代の人は、「ピーチャン」を用いないとのことである。

テンテン〔手拭〕

デンデン〔殿中（でんち）〕

「デンチ」は袖なし羽織のこと。

ベベ／オベベ〔衣服〕

ポッポ〔懐〕

〔ポケット〕のことではなく、〔ふところ〕のことを指す。大人用語では、「ホトコロ」。

○　ポッポエ、ナイナイ。

マイマイ〔前垂れ〕

〈食物に関するもの〉

エーモン〔おやつ〕

○　エーモン、オクナイ〔頂戴〕。

この語は、幼児より更に成長した子供達の日常語でもある。

オカイサン〔粥〕

この語は大人用語でもあるが、幼児に対しては、「カユ」「オカユ」に比して特によく用いる語である。

オチチ／オッパイ〔乳〕
スルスル／ツルツル／ツルツルサン〔うどん〕
チャチャ／オチャチャ〔茶〕
トト／オトト〔魚〕
　食用でない〔魚〕の意にも用いる。
ナナ／ナナサン〔菜っぱ〕
ニギニギ〔握り飯〕
　大人用語としては、「オニギリ」等。
ブー／ブブ／ブブー〔茶〕〔白湯〕
　各家で常時鉄瓶で白湯を沸かしてあって、幼児に飲ませるのは、茶よりも白湯の方が多かった。
ママ／マンマ／ンマンマ〔飯〕〔食物全般〕

〈動物に関するもの〉
カーカー〔烏〕
カッポカッポ／ヒンヒン／オウマサン〔馬〕
キャッキャ〔猿〕
コカコ／コカコッコー／コケコ／コケコッコ／コッコサン〔鶏〕
ケンケン／ケンケンサン／コンコン／コンコンサン〔狐〕
ジョジョ〔泥鰌〕

セミセミ〔蝉〕
チーチ／メメ〔虫〕
○　メメ、コワイエ。
○　メメ、カムエ。
チューチュー〔鼠〕
チュンチュン〔小鳥〕
チョチョ／チョチョー〔蝶〕
トト／オトト〔魚〕
ニャン／ニャンコ／ニャンニャ／ニャンニャン〔猫〕
ニョロニョロ／ノロノロ／ノロノロサン〔蛇〕
「ミーサン」は、大人用語として扱っておく。「ノロノロ」「ノロノロサン」は使用不使用で、人により意見が分かれる。
ポッポ〔鳩〕
モー／モーモー〔牛〕
○　モーノシリ（尻）、ババダラケ。
ワンワン〔犬〕
動物名に関しては特に、擬声語・擬態語をその動物の名称とする傾向がきわだつ。

〈植物に関するもの〉
ハナハナ〔花〕

動物名に比して植物名が少ないことが、一つの特色となっている。

〈自然現象に関するもの〉

ゴロゴロサン〔雷〕

ノノサン／ノンノンサン〔月〕

〔仏様〕の意にも用いるが、〔神様〕の意では用いない。

ピカピカ〔稲光〕

マンマンサン／マンマンチャン〔太陽〕〔月〕

〔神様〕〔仏様〕の意にも用い、「ノノサン」より意味の範囲が広い。

○　マンマンサン、アン〔お辞儀すること〕

〈その他に関するもの〉

分類法については、今後も検討を加えていくつもりであるが、以上の分類に入らない語を以下に挙げておく。

オンモ／ヨイヨイ〔戸外〕

○　ヨイヨイ、イコカ。

○　ヨイヨイ、ツレテンカ。

カンデンデン／ガンデンデン〔壬生狂言〕

○　カンカンデンデン、カンデンデン。

○　ガンガンデンデン、ガンデンデン。

この語を幼児語として取り扱うかどうかは、尚検討したい。

コンコンチキチン〔祇園祭〕

この語も幼児語として取り扱うかどうかは、尚検討したい。

チャイチャイ／チャブチャブ〔風呂〕

ブーブー〔燈明〕〔燈火〕

○　ブーブー、トボス。

ホイシッシ〔舟〕

○　高瀬の船頭、ホイシッシ。

以上名詞を意味分類別に挙げてきたが、「動作性」「状態性」の意味を有する名詞を別に取り扱うこととして以下に記す。

〈動作に関するもの〉

アカベ／アカンベ／ベー／ベカコ〔一本の指で下のまぶたの赤い裏を見せるようして、嫌だという意思表示をすること〕

この語を発しながら動作をすることが多い。

アッチン／オチン／オッチン〔座ること〕

アボ〔遊ぶこと〕

アン〔手を合わせてお辞儀をすること〕

○　アンシテ、タベルンヤデ。

アンヨ〔歩くこと〕

イー〔下の歯で上唇を押さえ、軽蔑の意思表示をすること〕

　この語を発しながら動作をすることが多い。

イヤイヤ〔頭を左右に振り、不承知の意思表示をすること〕

オイデオイデ〔手招きすること〕

オンブ／タタ／タッタ〔背負うこと〕

カミカミ／ナイナイ／ニャイニャイ〔よく噛むこと〕

　「カミカミ」より「ニャイニャイ」の方がよく用いられた。

クルクル〔物をまわすこと〕

ケンケン〔片足跳びをすること〕

ジョイジョイ／ジョリジョリ〔散髪すること〕

チャイ〔捨てること〕

チャッチャ〔歩くこと〕

テンテン〔叩くこと〕

○　オツム〔頭〕、テンテン。

トン〔倒れること〕

ナイナイ〔しまうこと〕

ニギニギ〔握ること〕

ニンニ〔煮ること〕
ネンネ／ネンネン〔寝ること〕
　○　ネンネンコロイチ、ネンネンヨー。
ノンノ〔帰ること〕
ハイハイ〔這い歩くこと〕
パイパイ／ポイポイ〔縄とび遊びすること〕
メンメ〔叱ること〕〔つねること〕
ヨイヨイ〔歩くこと〕
　幼児語の動作の殆んどは、この動作性の名詞の下に「スル」をつけた語形でできている。具体例については、後に記す。

〈状態に関するもの〉
アイタタ／イタイタ〔痛いこと〕
　この語で〔怪我〕自体をも、指し示す。
アカベ〔嫌であること〕
　○　ソンナコト、アカベヤ。
　幼児よりも成長した子供も、この語をよく用いる。幼児語として取り扱うか、検討を要する。
アチチ／アツアツ／アツツ〔熱いこと〕
〔ヤイト〕〔火〕〔熱い物〕の意でも用いる。

アッポ／アッポチャン〔阿呆であること〕
〔阿呆な子〕の意でも用いる。
カッコ／カッコー／カッコチャン〔賢いこと〕
〔賢い子〕という意でも用いる。

形容詞・副詞

カッコイ〔賢い〕
タンタン〔たくさん〕
バッチィ／ババイ／ババチイ／ババッチイ〔汚い〕

動詞

アボスル〔遊ぶ〕
○　アボシマヒョ。
アンヨスル〔歩く〕
エンエンスル〔声をあげて泣く〕
オチンスル／オッチンスル／チンスル〔座る〕
○　オチンシテ、タベンニャデ。
あまり用いないが、「アッチンスル」とも。
オキスル／オッキスル〔起きる〕

ケンケンスル〔片足跳びする〕
ジョイジョイスル／ジョリジョリスル〔散髪する〕
ダイダイスル／ダッコスル〔抱く〕
「ダッコスル」の方が東京風だという意識がある。
タタスル／タッタスル〔背負う〕
「オンブスル」は、あまり用いない。
○　タッタシテ。
○　タタシテモロテ、エーナー。
チャイスル／パイスル〔捨てる〕
チャイチャイ（ニ）イク〔風呂屋に行く〕
大人用語としては「オ湯ニ行ク」。
テンテンスル〔叩く〕
トンスル〔倒れる〕
ナイナイスル〔仕舞う〕〔隠す〕
ナゼナゼスル／ナデナデスル〔撫でる〕
ニンニスル〔煮る〕
ネンネスル／ネンネンスル〔寝る〕
ノノサンイク〔寺参りする〕
ノンノスル〔帰る〕

○　ノンノショー。
ハイハイスル〔這い歩く〕
パンスル〔割る〕
フーフースル〔息で吹く〕〔息で吹いて熱いものをさます〕
マイマイスル〔しまう〕
ムイムイスル〔剥(ム)く〕
メンメスル〔叱る〕〔つねる〕
〔つねる〕意のほうが主である。
モースル〔四つん這いになる〕
排便の後の尻を拭くために、よくこの姿勢をとらせる。
○　モー、シ。
○　モー、オシ。
ヤキヤキスル〔焼く〕
ヨイヨイスル〔歩く〕
ヨチヨチスル〔よちよち歩きをする〕

以上、品詞別に幼児語を記してきたが、ここに、幼児に対する「あやしことば」を挙げておく。

「アーガリメ　サーガリメ　クリット(ル)　マワッテ　ニャンノ　メ」

「イナイ　イナイ　バー」
「オチョチン　バイバイ」
「チャッチャッチャ　ヨイヨイヨイ。ココマデ　オイデ」
「チョチチョチ　アワワ（ババ）　カイグリカイグリ　オツム　テンテン」
「ネンネン　コロイチ　ネンネンヨー」

(三)　京言葉における幼児語の特色

本稿は、先にも述べたように、京言葉における幼児語をできるだけ多く記述することを当面の目的としている。他方言における幼児語との比較検討を通して「京言葉における幼児語」の特色をより明確にしていくことは、引き続いての課題としたい。

現段階の記述を以下に示す。

①　従来狭義の幼児語の特色として指摘されている幾つかの点に関して、同じ傾向を有する。

(イ)　発音しやすい音を用いる。

チャイチャイ〔風呂〕

(ロ)　語を覚えやすいように、擬声語・擬態語等、対象の性格とのつながりの強い語を、その対象の名称とする。

ニャン〔猫〕

(ハ)　一～二音節の音を繰り返して語形とする。これは、音構成が簡単であることと繰り返しにより音印象が強いこととから、その語を発音しやすく覚えやすいという利点と結びついている。

チャチャ〔茶〕
テンテン〔手拭〕

(ニ) 幼児の身辺の物や事柄、幼児が強い関心をいだく物や事柄を対象とする。そのため、「身体」「衣服」「食物」「基本動作」に関する語が多い。

テテ〔手〕
マイマイ〔前垂れ〕
ツルツル〔うどん〕
オキスル〔起きる〕

(ホ) 大人用語よりも広い範囲の対象を指し示す。

マンマ〔食物全般〕
ベベ〔衣服類〕

② 現在の京都の幼児語に比して、語彙量が大きい。又、促音が少ないなど、より方言的特色が濃いと言える。

③ 幼児語は、大人用語に切り換えられものであるから、本来「女性語」と範疇を異にする。しかし、時として、女子の表現に次のような用法を指摘しうる。

大人同士の会話において年齢差の大きい年下の聞き手に対して、一般には幼児語としての性格が強い語を、女子話者が用いることがある。直接的な物言いを避け表現を柔らかくしようとする意識と、聞き手が年下であるという意識とが、共に働いたものと考えられる。

特色としては、本論中で触れたものの他、以上の諸点を指摘しうる。

参考文献

楳垣実氏　『京言葉』（高桐書院・一九四六年）
中田余瓶氏　『京ことば』（非売品・一九五八年）
楳垣実氏編　『近畿方言の総合的研究』（三省堂・一九六二年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏編　『京都語位相の調査研究』（東京堂出版・一九七二年）
真下五一氏　『京ことば集』（芸術生活社・一九七二年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏共編　『京都語辞典』（東京堂出版・一九七五年）
井ノ口有一氏・堀井令以知氏共編　『分類京都語辞典』（東京堂出版・一九七九年）
前田富祺氏・前田紀代子氏共著　『幼児語彙の発達の研究』（武蔵野書院・一九八三年）
前田富祺氏・前田紀代子氏共著　『幼児語彙の統合的発達の研究』（武蔵野書院・一九九六年）
友定賢治氏　『育児語彙の開く世界』（『生活語彙の開く世界④』和泉書院・二〇〇五年）

第二章　京都町家の子供たち　――関連語彙からみる――

はじめに

藤原与一氏の著書に、『子供の民俗――一時代まえの生活とことば――』（和泉書院・一九八六年）がある。記述を一部引用する。

私は、この本が、若い人々の遊び友達になることを念願しています。また、この本が、年のいったかたたちにも相手にしていただけることを念願しています。

遊びのひとときに、これを見ていただきたいのです。学校でのひとやすみの時にも。また、夜分のちょっとした時間にも。

お年のかたたちには、遊びなかまの話題の一つにも、これをとりあげていただきたいのです。

本を手にとって、なんとなくお開けになった所を、ゆつくりと読んでみてはくださいませんでしょうか。

読みはじめると、心がなごやかになってくるような本が書けたらなと、私は思ってきました。人がにっこりとしてくださるような本が書きたいものだと、思ってきました。

今日のような世の中になりますと、なおのこと、私は、そうした願いをつよくしないではいられないのです。

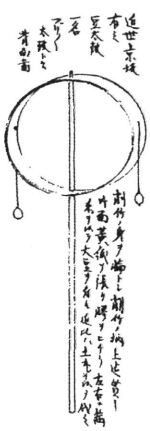
筆者はこの文章に心うたれた。今までの京言葉に関する拙稿は、待遇表現に関わるものが中心であった。いつも「ひと」を追い掛けてきた。拙稿「京言葉における幼児語」は待遇表現を扱ったものではないが、「子供」に対する関心を拠所としている。更に町家の子供の世界に関わる語彙を集めることにより、「心がなごやかになってくるような」そんな世界を覗き見たい。

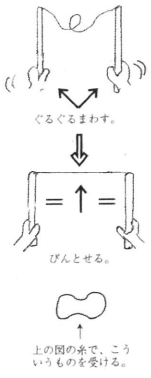
書き留めてきた京都の町家の子供たちに関わる語を資料篇と位置づけ、ここにまとめてみることとした。収集語彙を検証するという作業を通して被調査者の子供の頃に、少しでも近づきたい。現今の町家の子供たちとの差異は相当なものであったと考える。

以下に、分類のもと、子供に関わる表現について記していく。一つの態度として、共通語と同形のものも別扱いしない。俚言だけを扱うのではなく。現に使用された語を広く収録する筆者の態度によるものである。「説明」は、基本的に、被調査者の言に手を加えず記し、特に筆者が加筆した場合は（注）として示した。尚、『日本国語大辞典』（小学館・二〇〇〇年）等を参考にした場合は、（辞書参照）とした。調査結果を重んじ、参考は原則的にこの一書に限る。

(一)　おもちゃの名前

おもちゃの名前	漢字	説明
イチマハン	市松ハン	「イチマ」とも。又、少し改まって「イチマサン」とも。芯ははりぼてのようなもので、上に胡粉が塗ってある人形。大きさには大小ある。五〇センチメートルくらいのもの等。「ホンマノケー（毛）」がつけてある。手と足の関節がきれでできていて、ぶらぶら手足を動かせる。おなかにもきれがあててあり、背中は剥き出しになっている。おなかを押さえると泣く。男のイチマハンと女のイチマハンとがあり、それぞれ着物を着せて遊んだ。お雛さんの時には、一番下に飾った。美しくかわいい子供を、この人形にたとえて、「イチマハンミタイ」と言った。
イカ	凧・烏賊	凧。やっこ・金太郎・蝉などの形に作り、色をつけてある。やっこの形のものが一番多い。その形により、「ヤッコイカ」等の呼び名がある。「凧上げ」のことを「イカノボリ」と言う。
オコンメ		お手玉。小石又は小豆を入れた、一寸四方くらいの小袋五個か七個ずつを、一組にしたもの。主として女の子のおもちゃ。
オハジキ／オベチャ／イッテンキョー	御弾キ	おはじき遊びに用いる貝殻・小石・ガラス玉等。
ウソブエ	ウソ笛	土焼きの笛で鳥の「鷽（ウソ）」の形をしている。鳩笛等の鳥の形をした笛が多かった。
カザグルマ	風車	共通語と同形。実際に子供たちがおもちゃとしてよく用いた。

カネメン	金メン	金属製のめんこ。別に紙製のものがある。
ガッタンコ／ガッタリコン／ギッコンバッタン		シーソー。真ん中を支柱になるもので支えた長い板状のものの両端に、それぞれ子供がのって遊ぶもの。まわりの色々なものを利用して「ガッタンコ」にした。
コマ	独楽	木製で、金属製の軸がついている。まわすための紐がついている。
バイ	貝	材質は金属。元は巻貝を用いたので、この名がある。コマの一種「バイコマ」の略。男の子のおもちゃ。
ササブネ	笹舟	笹の葉一枚で作った舟。水に浮かべる。
タイコ	太鼓	共通語に意味も同じ。
デンデンダイコ	デンデン太鼓	片手で棒を持ち、手首をくりくり動かすようにして、鳴らす。「サートノミヤゲニナニモロータ　デンデーンダイコーニショーノフーエ」というねんねこ唄がある。  『守貞漫稿』（嘉永六年）
テマリ／オテマルサン	手鞠	手まり。女の子が、ついて遊ぶことが多かった。

デアボロ		大正頃の子供のおもちゃ。外国語か。「デアボロデアボロ」で終わる唄があった。 
チャンポン		シンバル（楽器の一種）に似たもの。お寺の「チャンポン」（ママ）を小型にしたもので、主に男の子のおもちゃ。 （注）「ジャランポン」の音訛か。
〈鉄砲の類〉		
タケデッポー	竹鉄砲	紙玉や豆・榎の実・杉の実等を弾として竹筒の一端にこめ、他の端より空気圧をかけて弾を鉄砲のように打ち出すようにしたもの。弾の種類により、呼び方の違いがあった。ここで言う「竹鉄砲」は、総称。
イシデッポー	石鉄砲	筆の軸ほどの太さの竹に弾として小石をつめる。竹筒の一方から細長い木や竹の棒を押し込み、もう一方から弾を飛び出させるもの。
カミデッポー	紙鉄砲	石鉄砲と同じ仕組みで、弾が紙をまるめたもの。
スギデッポー	杉鉄砲	篠竹の筒に杉の実をつめて、パチッと言わすもの。大正期あたりの子供が遊んだ。仕組みは石鉄砲と同じ。
マメデッポー	豆鉄砲	石鉄砲と仕組みが違うものがある。豆を弾とする。弾く。
ミズテッポー	水鉄砲	竹筒の節に大きな穴をあける。もう一方から水を入れ細長い木や竹の棒を押し入れて、先の穴から水を飛ばす。

ニチゲツボール	日月ボール	木製。糸の先についている球を、棒の先につけた木製の受けぐちで受けるおもちゃ。糸のもう一端は棒の受けぐちの近くについている。
バイ		コマの項参照。
ハイコ		（注）「アマガツハウコ」からこの名があり、「アマコ」とも。おもちゃというよりも、宗教的意味から、人形（ひとかた）として飾っておくものであるが、別に、はいはい人形として遊びに用いられた「ハイコ」もあった。「アマガツ」を項目としている辞書類もある（辞書参照）。
ハゴイタ	羽子板	羽根つき遊びに用いる板。上等のものは押し絵になっていて重いので、これは飾り用にした。安いものは、焼き絵になっており、更に泥絵のものもあった。
ブーブー／ビービー		両手でひもをひっぱると鳴るおもちゃ。金属製の小さな丸い板に、二つ穴をあけてある。ひもを穴に通し、きりきり巻いておく。
ポッピン		フラスコの首を長く伸ばし底を薄くしたような形の、ガラス製のおもちゃ。ビンの小さな口から息を吹き入れ、底を「ポッピン」と鳴らせて遊ぶ。
ユミヤ	弓矢	共通語に同じ。小さい弓と矢。男の子のおもちゃ。
ヨコブエ	横笛	「竪笛（タテブエ）」もあった。共通語に同じ。

以上が調査から得た子供たちの「おもちゃ」の名前である。これで網羅できたとは思えないが、先に紹介した被調査者から得た調査結果のほぼすべてとして紹介する。

次には、遊びの名前を記す。引き続き現在とは違う子供たちの姿を追いたい。

(二)　遊びの名前

遊びの名前	漢字	説明
イカノボリ	烏賊ノボリ	凧上げ。イカノボリをしている他の子供のイカを「イーカオトロ」と言って追いかける。主として大人の遊びとしてのイカノボリは、次のようであった。 ○互いのイカを落とし合う。 ○糸にガラスの粉をつけて、その糸で、他の大人のイカの糸を切る。 ○互いに、あげたイカの高さを競う。
イシケリ	石蹴り	
イシガッセン	石合戦	二つの組に別れ（例えば一つの町内と他の町内と）、距離をおいて、石を投げ合う。
イトトリ	糸トリ	綾取り。
イッテンキョー／オハジキ／オベチャ		おはじき。貝殻・小石・ガラス玉等を出し合って席上にまき、指先ではじき、あてて取り合いをする遊び。
オカーサンゴッコ／オカハンゴッコ／オカハンゴト／ママゴト		ままごとのこと。「ママゴト」が一般的。
オコンメ		お手玉。先の世代で「ナナコ」と言い、次の世代で「オジャミ」と言う。この遊びには、唄がつくことが多い。

オシロムケノカンノンサン	後向ケノ観音サン	二人が背中合わせになって、一方が一方を背負う遊び。御厨子を背負って行者が歩く時、中の観音さまが、行者と背中合わせに後向きになることから来る遊び。
オンゴロモチ		オンゴロモチは、もぐらのこと。紐の先に空缶等をいくつもつなぎ、もう一方の端を持つ。缶をひきずり、大きな音をたてて歩く。元は、宗教的な祭りである。それを真似て遊ぶ。 唄、「オンゴロモチ　オコルナ　ナマコドン　オンマイジャ」
カクレン／カクレンボ		「カクレンボ」という言い方が一般的。
カタクマ／カタグルマ	肩車	
キビギッチャンポ（ン）		二人で小指と小指とをからませて、「キビギッチャンポン」の唄をうたって遊ぶ。約束する時の所作。 唄「キビギッチャン　ウソツイタラ　ギンノカンザシ　ジューサンボン　ヤブレタイカキニ　チーサンバイ　イエミッツ　クラミッツ　ヤブレタイカキニ　チーサンバイ」 （注）イカキは、竹を編んだざるのこと。
クビカザリツクリ	首飾リ作リ	曼珠沙華や蓮華の花で首飾りを作って遊んだ。主として女の子の遊び。
ゲタカクシ	下駄隠シ	鬼になった子供が両手で目を覆ってしゃがみ、そのまわりを、他の子が手をつないで囲む。「ゲタカクシ」の唄をうたいながら、周りの子供たちが一方向へまわり、唄が終わってまわるのを止める。鬼に、その時鬼の真うしろに立っている子供の名前を当てさせる遊び。
ゲタウラナイ	下駄占イ	自分がはいている片一方の下駄を高く放り上げて、その落ちた際の表裏で、明日の

		天気を占う。表が晴れ、裏が雨、横が雪。
コトロ	子取ロ	夕すずみの時に遊ぶことが多かった。 （注）次に記す「ジャンジャノモモクイ」と同じようなものか。
ササブネ	笹舟	笹の葉で舟を作って、水に流して遊ぶ。
ジャンジャンノモモクイ		縦一列に並び、前の子供の帯の後ろを持って、つながる。一番前の子供は親で、両手を広げて、鬼が来るのを妨げる。「ジャンジャノモモクイ　マダモモアオイ」とはやす。一番後ろの子供が鬼に捕まれば、鬼が代わる。
タマコロガシ	玉転ガシ	仕掛けが大きい。一つの部屋ほどの大きさのものもあった。精巧な仕組みになっている。 （注）この説明にあう辞書の記述が見られなかった。
ダルマオトシ	達磨落トシ	縁日等で遊んだ。まりをあてて、玩具の達磨を落とす遊び。 （注）あるいは厚く輪切りにした木を重ね、一番上の達磨を落とさないように気をつけて、木づちで一段ずつ弾きだす遊び。
タンテイゴッコ	探偵ゴッコ	
ツカマエ	捕マエ	鬼ごっこ。
テズマ	手品	手品。奇術。
テッポウチ	鉄砲撃チ	吉田さん（吉田神社）のお祭り等で遊んだ。おもちゃの鉄砲でコルクの弾を飛ばし、人形等並べてあるものに当てる。
テマリツキ	手鞠ツキ	「テマリ」「オテマルサン」と呼ばれるまりをついて遊ぶ。手まり唄をうたって遊ぶことが多い。 （注）後述の唄の項参照。

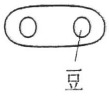
デングリマイ		でんぐりがえし。
テンジンマイリ	天神参リ	二人の子供が向かい合い、両手を上にあげて相手とつなぐ。その二人の手の下を、「コーコワ　ドーコノ　ホソミチジャ」の唄をうたいながら、他の子供がくぐり抜ける。
ドウマ	胴馬	三人一組で遊ぶ。前に一人、後に一人、上に一人で組になって、他の組のものと、上にのっている子供を落とし合って遊ぶ。運動会等で行われる騎馬戦は、四人で一組になる。前に一人、後に二人、上に一人。
ドロボーゴッコ	泥棒ゴッコ	つかまえ。「逃ゲテ走シルワドロボーノ子、アトカラ追イ掛ケ巡査ノ子」とはやす。
バイバイ		幼児語。縄跳び遊び。
バイマワシ／ブーンマワシ		独楽。「バイ」は、元は巻き貝でできていて、この名がある。材質は金属（鉄）で紐を巻きつけておき、この紐をひいて、こまをまわして遊ぶ。バイマワシは、ゴモクカゴ（ごみ箱）などを二つ間をあけて置いた上にござをかけ、そのござの中央を少しへこませておいて、その上でバイを廻す。二人で、相手のバイを自分のバイで弾き飛ばし遊ぶ。「ブーンマワシ」とも。 （筆者） 参考：江戸『絵本御伽品鏡』（享保十五年）

ハシリ	走リ	かけっこ。二人以上で走って、速さを競う遊び。
ビーダマ	ビー玉	ガラスでできたビー玉には、大小がある。平たい所にビー玉を撒き指で弾いて他のビー玉に当てて遊ぶ。 （注）指で弾いて、穴に入れる等他の遊び方もあったと思われるが確認できていない。
メンコ		メンコの材質は、金属（金メン）や分厚い紙。平たいもので、表裏がはっきりしている。地面や床等に置いてある相手のメンコを、自分のメンコをうまく地面や床にあてて、ひっくり返して遊ぶ。相手のメンコをひっくり返せば、それを自分のものにできた。カネメンは、一円玉か五円玉くらいの大きさ。
メンナイチドリ	目無イ千鳥	鬼は、手ぬぐい等で目かくしをして、他の子供が手を叩く音を手がかりに、その子供を捕える。次のように繰り返してはやした。 「メンナイチドリ　テノナルホーエ　コチラコチラ」
ヤマグニタイ	山国隊	時代祭りの山国隊の真似をして、以下のように囃して練り歩く。 「ピーヒョリ　ホットイテ　ジャカジャカジャン　ジャカジャカジャン」
ワーマワシ	輪廻シ	戸外の遊び。主に男の子の遊びであった。手に先のまがった棒を持ち、その先を輪についている金具に引っ掛けて廻して遊ぶ。金具がちゃりんと鳴る。輪は比較的大きなもの。

以上が、遊びの名前である。遊びの地域性については大田才次郎氏編『日本児童遊戯集』（〔平凡社東洋文庫一二二〕・一九八六年）（明治三十四年博文館刊『日本全国児童遊戯法』の復刻）を参照した。京都・大阪・東京その他の地域の遊びについての記述がなされている。遊びの名前は、東京が一番多く、大阪が次に多い。京都は少ない。記述の担当者の力量によるものなのか。遊びの名前の地域による重なりは案外少ない。紙数の関係から、ここではこの文献の紹介に留めておく。

(三)　おやつの名前

おやつの名前	漢字	説明
エーモン／ナンゾ		おやつの総称。
〈飴　類〉		
アメザイク	飴細工	縁日等で、飴売りが売った。子供の目の前で鳩・人形・瓢箪等の飴を形作って売った。その細工物のこと。葭(よし)の茎の頭に、飴のある程度形になっているものをくっつけたのち、空気を吹き入れてふくらませる。その後色をつける。元の飴の色は、白い。たけひごの先に付けることがあった。
アメンボー	飴ン棒	棒飴。
アリヘイトー	有平糖	平たくて細長い飴。縞があって、真ん中でねじってある。
オタヤンアメ		棒状の飴で、どこを折ってもお多福の顔が現われる。「アメノナカカラ　オタヤンガ　デタデタ」と売りに来る。奴さん等の顔のものもあった。
キリアメ	切リ飴	棒飴を輪切りにした形の飴。
ドングリ	団栗	飴玉。「アメダマ」「テッポーダマ」とも。いろいろの色のものがあった。白い線が入っているものもあった。茶色のものに限るとする、被調査者も。
ネコノフン	猫ノ糞	黒っぽい飴。円柱形で、豆がいくつかついている。その形状から、この名がある。
ベッコーヤキ	鼈甲焼キ	べっこう色をした板状の飴。いろいろの物の形をかたどったりしてある。

マメヘイトー	豆平糖	細長い飴に豆が入っている。 
〈豆菓子の類〉		
アズキナット	小豆納豆	小豆を砂糖煮して作った甘納豆。
キントキマメ	金時豆	金時豆を砂糖煮して作った甘納豆。
ゴシキアメ	五色飴	空豆や豌豆を中に入れた砂糖菓子。五色（赤・緑・黄・にっき・白）の色がついている。にっきは、茶色。明治になってできた。ふなはし、夷川の店名「かくだ」のものが有名。
シオエンドー	塩豌豆	豌豆を煎ったもの。塩味が付いている。
シオマメ	塩豆	「シオエンドー」に同じ。
タヌキマメ	狸豆	皮つきの空豆を煎ったもので、皮を弾けさせていないもの。ただ一人の被調査者から採取した語。
トーロクマメ	斗六豆	斗六豆を甘納豆にしてあるもの。
ハジケマメ	弾ケ豆	皮つきの空豆を煎ったもので、皮を弾けさせてあるもの。
ナンキンマメ	南京豆	ピーナッツ。
マメイタ	豆板	（注）とかした砂糖にいり豆をまぜ、平たく固めたもの。丸形や角形がある。
〈餅・饅頭の類〉		

アミガサ	編笠	よもぎ餅を丸く平たくしたものを二つ折りにして、中にあんこを挟んだもの。編笠に形が似ているのでこの名がある。「ヨモギモチ」とも。
アワモチ	粟餅	餅粟（モチアワ）を蒸してついた餅。売りにきた。（注）もとは本物の粟の餅であったが享保頃より、普通の餅を粟の色に染めたものとなった（辞書参照）。
アンコロ（モチ）		餅を中にして、あんこで包んであるもの。こし餡が主。
アンダマ	餡玉	くず餅の小さいもの。
アンマキ	餡巻キ	あんこを、メリケン粉を練った生地でまいてある。細長い丸太状。
イマガワヤキ	今川焼キ	メリケン（メリケン粉）の水溶き生地を、鉄板の型に流し、餡をのせて更に生地をかけて焼いたもの。その形から「タイコヤキ」とも。昭和になっても、よく見受ける。（注）平成でも見受ける。
ウイロ	外郎	青竹にういろうを入れたもの。錐で青竹の節のところに穴をあけて、吸い出すように食べる。
オマン	饅頭	饅頭の総称。
キビマンジュー	黍饅頭	皮がきびでできている饅頭。（注）栗の形をしている。
クリマンジュー	栗饅頭	栗あんを中に入れて焼いた饅頭。
サカマンジュー	酒饅頭	（注）小麦粉に酒を加え、ふくらし粉をまぜて皮とし、餡を包んで蒸した饅頭。
ジョーヨーマンジュー	上用饅頭	中の餡はこし餡が主であるが、粒餡のものもある。山芋入りの白い皮で包んである。
ムギマンジュー	麦饅頭	（注）小麦粉で皮を作った饅頭。

モチマンジュー	餅饅頭	餡を餅で包みこんだもの。
オランダ		メリケン粉生地のものを油で揚げて、黒砂糖をまぶしたもの。細長いものをねじってある。
カシワモチ	柏餅	（注）蒸した上新粉の餅で餡を包み、柏の葉でくるんだ菓子。
キビダンゴ	黍団子	黍の粉で作った蒸し団子。
キンツバ	金鍔	調査時のキンツバより、皮が黄色い。（注）「キンツバ焼キ」の略。
シンコ	新粉	しんこ餅。米の粉で作った蒸し菓子。
シンコザイク	新粉細工	米粉を水で練って蒸したものを、諸形に作る。彩色してある。甘味がついている。鳥・その他の動物・草木等の形に作ったシンコを、方一二寸の薄い杉板に粘す。子供がこれをもてあそんだり、食べたりした。
スズヤキ	鈴焼キ	メリケン粉の皮の中に、餡が入っている。鈴の形をしている。
タイヤキ	鯛焼キ	鯛を型どった鉄板にメリケン粉の水溶き生地を流し、餡を中に入れて焼いたもの。明治の頃から見られる。（注）平成でも見受ける。
ナマヤツハシ	生八橋	鳩や花の形に作ってあった。「八橋」の焼いてないもの。三宅八幡に行ったら、鳩の形をしていた。
ミタラシ	御手洗	みたらし団子。小さい団子を串に刺し、焼いて砂糖蜜か醤油をつけたもの。味噌をつけることもあった。
ミナヅキ	水無月	ういろうの上にあずきをのせた、三角形の生菓子。水無月祓（旧六月）にこの菓子を食べる習慣から、この呼び名がある。
ロッポーヤキ	六方焼キ	「キンツバ」の皮を厚くしたようなもの。

ヤキモチ	焼餅	火であぶって焼いた餅。古くは、中に餡を入れた餅を焼いたものを言う。（辞書参照）。
〈煎餅の類〉		
アラレ	霰	おかきの一種。今のように多種の形ではなく、小さくてふわふわと柔らかい「霰」状のものであった。
オコシ		おこしには、栗おこしと岩おこしがあった。ゆう（柚子）が入った三角のおこしがあったが、丸いもの等もあった。陰暦一一月八日に京都を中心とする神事であるお火焚きの時に、三角のものを貰った。
オセン	オ煎	煎餅。
カキヤ		かきもち。
カライタ	唐板	八橋のような形をしたもので、焼いてある。一種のクッキー。上御霊神社の境内で売った茶菓子。
カリントー	花林糖	（注）小麦粉に砂糖を加えて練り、棒状にして油であげ、黒砂糖等をまぶしたもの。
シオセンベイ	塩煎餅	塩味の煎餅。硬くない。
シモノハシ	霜ノ橋	八橋に砂糖がかかっているもの。
タイホーセンベイ	大砲煎餅	大筒の形をしたものに入れて売り歩いていたので、この名がある。ごく普通の煎餅。
ヒシアラレ	菱霰	（注）菱形の霰か。参照辞書になし。
ブブアラレ	ブブ霰	大変に小さい、粒状のあられ。お茶漬けに入れたりする。
ボーロ		（注）ポルトガルからの外来語。小麦粉に卵を入れて軽く焼いた小さな丸い菓子。

マツバ	松葉	お茶菓子。松葉の形になぞらえて、焼いてある。ごく細い形に仕上がっているものが、良。
ヤツハシ	八橋	京都名物。橋の形等をしているお煎餅。
〈芋　類〉		
イモセンベイ	芋煎餅	さつまいもをごく薄く切って焼いて、砂糖と胡麻をふってあるもの。
ツボヤキイモ	壺焼芋	さつまいもを壺形の器に入れて蒸し焼きにしたもの。
ムシイモ	蒸シ芋	蒸したさつまいも。売っていた。赤芋（皮が赤くて細い）と白芋（皮が白っぽくて細い）の二種があった。
ヤキイモ	焼キ芋	焼いたさつまいも。一銭とか五厘とかで、売っていた。
〈飲み物の類〉		
アマザケ	甘酒	（注）米を柔らかいかゆの程度に炊き、少し冷えた時に麹を加えて混ぜ合わせ、発酵以前に飲む飲料。
アメユ	飴湯	一銭か五厘で売っていた。生姜を入れることもある。熱いのと冷たいのの二種があり、「アメユー」と売りに来た。
ニッキスイ	肉桂水	にっきの味のする飲み物。
ミカンスイ	蜜柑水	みかんの味のするジュース。
ラムネ		炭酸系の飲み物の一つ。
レモンスイ	檸檬水	レモンの味のするジュース。
〈砂糖菓子の類〉		

オコタ	才炬燵	昔のこたつの形をしたかるやき。上の真ん中が盛り上がっている。
カルヤキ	軽焼キ	砂糖を煮とかしたものに、重曹を入れて膨らませたもの。
コンペートー／コンペントー	金平糖	砂糖を小さく固めたもの。粒の表面に突起がいくつも出ている形。芯にけしの実やにっきが入っている。
ワタガシ	綿菓子	ざらめの砂糖を材料にして、熱を加え、回転する機械の中で糸状にして、割り箸の先にくるくる巻きつけたもの。ふわふわした外形からこの名がある。大正の頃からか。
〈果物植物の類〉		
イタドリ	虎枝	自生しているものを、皮をむいて塩をつけて食べた。
ウメ	梅	青梅ではなく、熟しているものを食べた。
オミカン	才蜜柑	みかんのこと。「お」がつく形が、一般的。
キンカン	金柑	みかん科。丸きんかんと長きんかんとがあった。
グミ		ぐみは庭木でもあるが自生している。ぐみの木の実。
ニッキコブ	肉桂昆布	とろろこぶをとった後の昆布の白い芯に、にっき水を塗ったもの。売手が、その場で塗ってくれる。
ニッキシバ	肉桂柴	肉桂の柴。十本ほどを、赤いもので括ってあった。シガンデ(かみしめて)味わった。
ハダンキョー	巴旦杏	(注)すももの一種。

ホシガキ	干柿	いくつかの種類があった。
ギオンボ	祇園ボ	祇園さんで売っていた。ぺちゃんこの干柿。
クシガキ	串柿	
マッカ／マックワ		まくわ瓜
ヤマイチゴ	山苺	
＜パン・カステラの類＞		
アンパン		
カステラ		かすてら。
マツカゼ	松風	お茶菓子。西本願寺の真ン前や、大宮花屋町にこれを売っている店がある（調査時点で）。
カントダキ	関東炊キ	おでん。いいだこ・こいも・こんにゃく・ひろうす・焼き豆腐等を一緒に炊いたものを、夜店で売っていた。

以上、おやつの名前を、分類のもとに記した。

「うどん」が一銭五厘の時期、五銭もあったら子供のおやつを買うのに充分すぎた。

各家庭には、菓子屋が引き出しのたくさんついた箱を持ってまわった。引き出しのそれぞれには、見本の菓子が入っていて、欲しい菓子を注文する。後刻注文の菓子を菓子屋が届けて廻る。勿論、他の入手経路もあった。

(四)　唄と言い伝え

次に子供たちがうたった唄を順不同で示す。京都市の他地域と比較したところ、同じ唄でも地域差が見られるという指摘ができる。ここでは従来の被調査者から得た唄を順不同で記す。

○　デンデンムシムシ　デムシデナ　カマブチワロ

○　ホーホー　ホタルコイ　カネキットン　ヒルワ　オカカノ　チチノンデ　バンニワ　チョーチン　タカノボリ

○　アメガ　ショボショボ　フルバンニ　タヌキガ　トクリモッテ　サケカイニ

○　ユキヤコンコン　アラレヤコンコン　オテラノ　カキノキニ　イッパイ　ツモレ　コンコン　ユキハナガ　チルゲナ　ソラニムシガ　ワクゲナ　オーギ（オ）　コシニサイテ　キーリキリット　マイマショ

○　オツキサン　イクツ　ジューサン　ナナツ　ナナオリキセテ　オマンワ　ドコイタ　アブラカイニ　スカイニ　アブラヤノカドデ　スベッテコケテ　アブライッショ　コボシタ

ソノアブラ　ドーシタ　イヌガネブッテ　ソーロー

ソノイヌ　ドーシタ　タイコニ　ハッテ　ソーロー

ソノタイコ　ドーシタ　アンマリ　タタイテ　ヤブレテ　ソーロー

ヤブレタタイコ　ドーシタ　ヒニクベタ　ソーロー

ソノハイ　ドーシタ　ムギニマイテ　ソーロー

ソノムギ　ドーシタ　ハトガタベタ　ソーロー

ソノハト　ドーシタ　ニシノヤマエ　トンデッタ

（子守りをしながら歌う・お月さん見たりして遊んだ）

○　ニジョーノ　ニシトイン　ニシイル　ニケンメノ　ニワトリ　ニワカニ　ニシムイテ　ニゲタ

（被調査者の（C）のみ記憶）

○　シジョーノ　シンマチノ　シンコヤノ　シンベーサン（ガ）　シリニ　シンコ　ハサンデ　シンキガッテ　シナハッタ

○　アア　シンニョー（ギョー）ドー　（シンド）ココラデ　ヤスンデ　エイカンドー　メシ　クローダニ（サン）

○　（冒頭不明）ニカイワ　コワイ　コワイワ　ユーレイ　ユーレイワ　アオイ　アオイワ　スイカ　スイカワ　アカイ　アカイワ　トンガラシ　トンガラシワ　カライ　カライワ　オシオ　オシオワ　シロイ　シロイワ　ユキ

（しりとりうた）

○　ウスヒキ　コメヒキ　コメカマソ

（向かい同士に児の両手をひいて臼を回す様にする）

○　ドンドン　タタクワ　ダレサンジャ　ダイマルデッチ　イマゴロ　ナニシニ　ゴーザッタ（オイデタカ）

○　セキダガ　カワッテ　カエニキタ　セキダノ　ハナゴワ　ナニ　ハナゴ　チョイ　チョイ　ハナゴ（シロトアカトノ　ネジバナゴ）　コチョコチョ

○　カンゴ（カゴ）　カンゴ（カゴ）　ジューロクモン　エドカラ　キョーマデ　サンモンメ　フカイカワエ　ハメヨカ　アサイカワエ　ハメヨカ　ヤッパリ　フカイカワエ　ドボン

○　オンセンノセ　オシロイノセ　オーサカオサカデ　ヨッカデ　ドン　ヨツヤ　アカサカ　コージマチ　オカゴニノルノワ　イクラデス　ゴヒャクデス　モー　チョット　マカランカ　スカラカドン　オマエノコトナラ　マケテヤロ

（手鞠うた）

○　デーンコ　デンコ　ダレノ　トナリニ　ダレガイル　○○○サンノ　トナリニ　○○○サン　ヨーサシタ

○　ボンノジューロクニ　ハツカネズミ　ツカンデ　ゲンプクサシテ　カミユーテ　ボタモチ　カイニヤッタレバ

ボタモチ　カワズニ　ヒルネシテ　ネコニ　チョイクワレテ　ニャゴニャゴニヤゴ

○ユービンヤサン　ハシリンカ　モーカレコレ　ジューニジヤ　エッサカ　マッサカ　ドッコイショ（縄跳び）

○イイダシ　コキダシ　ワライダシ（誰かおならをした時）

○ヘー（ヘイ）ワ　クサイ　ランプワ　アカイ（返事をさせて「ヘー」といえば「ヘイ」と直ぐこう言う）

○ハイワ　ハケタノ　ハジケマメ

○インデーコ　ダイモンジ　ダイモンジガ　トボッタ　モー　ヒーガ　クレル（遊びを止めて帰る時に言う）

○ヨンベ　ヨコチョデ　ジューバコ　ヒロテ　アケテミタレバ　ホコホコマンジュー　ニギッテ　ミタレバ　タヌキキンダマ　ハッチョジキ

言い伝え

○カイナデ

当時は汲み取り式の便所であった。便器の中から「カイナデ」が手を出してつるりと尻をなでたという。子供たちは本気で恐がったということである。

（注）おとしこしの夜に限ったという発言があったように思うが、今は不明。

○マクラウリ

お年越しの夜に町内の家に「マクラハズシイリマヘンカ」等と言ってまわった。「カイマヒョ」と言ってもらったら、枕をはずす寝相の悪さ等がなおると考えられていた。

○カミノハシ

紙などを粗末にした時に、子供に「死んだら地獄で紙（あるいは粗末にしたものの名前）の橋を渡らんなんで」と言っ

て、物を粗末にするのを諌めた。

ここまで、子供関連語・表現を見てきた。筆者にとっては、子供たちがどのような生活をしていたか、更に知りたいところである。着ていたのは、着物。履いていたのは、下駄と草履。いろいろな布地のマイダレ（前垂れ）をつけていた。学校に行く時の持ち物は、石筆、石板等。遊んだのは、町内の広場等。学校から帰ると、父母の所に行って持ち物を横に置き正座してあいさつをした。長幼の序が厳しく、父母が不在の時は兄姉に同じようなあいさつをした。（既出）

（注）父母は忙しいので、子供の教育には主に祖父母があたった（祖父母に対するあいさつは未確認ながら、当然あったと思う）。

比べようのないほど、子供たちの環境が変わった。明治三〇年代生まれの町家の子供たちについて、ここに心をこめて記した。